

京浜急行大森町駅から住宅地を迷いながら東に十数分歩き、堀沿いの細い道を抜けると突然、真っ白な砂の浜辺が目飛び込んできた。大田区立「大森ふるさとの浜辺公園」だ。東京都内で初の区立海浜公園という。

湾曲した人工砂浜は約400坪にわたって続き、陸側の斜面に植えられた草の緑とのコントラストがまばゆい。猛暑のせいか、平日だからか、夏の盛りなのに人出はそれほど多くない。素足で虫取り網を持った子供たちが水面近くを飛ぶトンボ、若々しい樹木にとまるセミを追い求めて走り回る。

のんびりと友人3家族で砂浜にビーチマットを広げてくつろぐ大田区東蒲田の主婦、高木真理子さん(41)は、初めて訪れた公園の美しさのどこかに驚いたという。

「ここは昔、どんな場所だったのかな。この辺りの海辺は工場が多いから近づいたことはなかったし、想像がつか



# 海岸線物語

## ⑤ 東京・大森ふるさとの浜辺公園

# はるかなる海苔の記憶



ない」  
香川県小豆島から運び込まれた山砂や砂岩を加工したという白砂には、大小無数の足跡。粗めに砕いて仕上げられた砂は「風で近隣に飛び散らないように」(区担当者)という、自然ではかなわない配慮があった。

夕方になると心地よい風に誘われるように、散歩する人たちの姿が増え始めた。近くの工場から終業のサイレンが聞こえる。沖の人工島同士を結ぶ橋にはモノレール、空には離着陸する飛行機の機影

が、ときおり見える。辺りは江戸時代から続く日本有数の海苔の産地だった。だが昭和37年の漁業権放棄で沖の埋め立てはどんどん加速し、砂浜の風景は失われていった。

先祖代々200年以上も海苔養殖を手がけた元海苔漁師、平林義正さん(81)「同区大森東」は「大森の海苔はね、多摩川の真水、隅田・江戸川の真水と海水がちょうどよく混じりあい、よそのものと比べても香り、柔らかさ、ツヤは抜群で自慢だった」。

④「大森ふるさとの浜辺公園」で水遊びをする子供たち。浜辺はきれいに清掃されており、砂浜遊びの穴場だ  
⑤「大森ふるさとの浜辺公園」南側にある貴船堀の船だまり。昔は海苔船がにぎやかに行き来する水路だった  
東京大田区大森東



昔の遠浅の海を思い起こさせるような砂浜。ぼんやり眺めるうちに、公園名の「ふるさと」には、海苔養殖にかかわった人たちの「原点」の思いが込められていると感じた。(社会部 高梨美穂子)

波が静かな遠浅の海は海苔づくりに最適だったという。海苔生産用具は現在、南馬込にある区立郷土博物館に多数所蔵されている。だが「海の道具を山側に持っていくのは納得できない」と当時を知る海苔関係者は口をそろえる。こうした関係者の熱い思いが投影されたのが、来春完成する海苔資料館(仮称)だ。資料館では、海苔を四角に整える「海苔付け」作業を体験できるようにするなど、子供らに伝統を伝えていく予定だ。当時、海苔養殖用の船が行き来した公園隣接の貴船堀には、今も漁船が並び、付近には海苔問屋が多数軒を連ねる。公園に戻って砂浜から水面を見た。ひっきりなしに魚が飛び跳ねている。「水に入ると足下を小さな魚たちがスイスイと泳いでいくんです」と親子連れ。ボラやスズキ、ハゼ、ときには砂地を好むカレイも姿をみせるという。